

日本医史学会と芸備医学会創立に 貢献した医人達

江川 義雄

本年度で芸備医学（広島医学会の前身）は創立九〇周年を迎えることになる。

本会創立に尽力した医師達は、また中央にあつても、日本医史学会をはじめ、多くの学術発展の基礎となる学会や医学情報提供の手段であつた医学雑誌の創設や創刊を手がけてきた。それが黎明期にあつた日本医学の発展に尽した功績は多とすべきである。

本年度学会においては、富士川英郎氏による富士川游、岡田靖雄氏による呉秀三についての発表がある。その代表的人物に加えて、当地出身者に尼子四郎、三宅良一、小田平義がいる。

私は、これらの先人達の業績にふれ、呉秀三、富士川游らとの関係についてのべることにする。尼子四郎（一八六五

一九二九）は広島医学校時代、富士川游の同級生で特に親しく、上京して東大専科青山内科に入り、芸備医学会、日本医史学会の創立の発起人である。

医学中央雑誌の発刊は、四郎、富士郎父子二代にわたる画期的出版事業であつて、わが国の医学研究に貢献した役割は極めて大きい。

当時、未組織の医界にあつて、医の根本理念である医道の昂揚を第一に掲げ、学術の振興に早くから着眼して、それらに関連する諸事業を興した。また医師の経済安定への基盤づくりを目的にした事業にも卓越した実行力を示した人物である。

三宅良一（一八七五—一九六一）は富士川、尼子と同郷、同時代の医師で、岡山の第三高等学校医学校卒業後、富士川をたよつて上京、この三人で丙申社をつくり、その事業として、芸備医学会を明治二九年五月に創立した。その會長に呉秀三を推し、企画・運営の富士川、推進・実行としての尼子、それを支持する三宅の構成で発足した。三宅は呉、富士川と共にドイツ留学後は台仙医学専門学校、台湾総督府専門学校の眼科教授となり、帰郷後は医政にも参画

するところがあつた。それより遅れて、小田平義（一八八三—一九四六）は富士川游をたより、上京し、終生その傍にあつて、個人的にも、会の事業遂行にも強力有能な助手として活躍した。

「中外医事新報」は昭和二年に、日本医学史会の機関誌に充当されたが、小田はその理事であり編集担当者でもあつた。また各種学会や医学雑誌の企画・運営や刊行には驚異的な手腕を発揮し、かくれた明治・大正・昭和にわたる医界の功労者といえる。

山陽地方という地域性にあつて、これら先駆的事业の芽生えを考察すると、各人の天分や能力が秀れているということもさることながら、家庭環境における教育的条件が恵まれている。特に父親の薫陶、良師による指導は医学教育以前の少年時代の人間形成がみられ、長ずるに及び、和魂漢・洋才の精神的基盤から発想する医療観を抱いているということである。

また会の活動対象は狭い地域性に限局することなく、視野は国際的で、その尺度は当面する医療事情に対応している近代性をもっているといえよう。

そこに会のもつ流行への普遍性があり、医の本質への不易性が存在するからであらう。

（広島県支部）